

公園に子どもたちの 歓声が響く

|| とっとり冒険きち ||

公園に響く 子どもたちの歓声



湖山町北の湖山公園に子どもたちの歓声が響く。公園の斜面では段ボールをそりがわり勢いよく滑り降りる子どもたち。木漏れ日の中ハンモックに揺られる子どもたち。テープルの上に工具を広げて工作に夢中の子どもたち。みんな思いおもいに時間を過ごしている。その中に二十代の

若者が数人、子どもたちに笑顔で手を引つ張られている姿が見える。この公園には、毎月第二土曜日に子どもたちが主役の「とっとり冒険きち」が出現する。主催するのは市のボランティアセンターに籍を置く石原達也さん（二十六歳）たちである。子どもたちにとつて友達とはまた違う特別な存在のようだ。この活動は石原さんが学生だった三年前、大学時代の友人たちとスタートした。その当時は名前も漢字の「基地」、ちなみにこの名前も「やってくる子供たちが「ぼち」と読み間違えるのでひらがなにした」と、すべてが子ども主体である。

体験を通じて学ぶもの

自然の多い鳥取とはいえ、子どもたちが外で思いっきり遊ぶという体験はなくなつて



代表の石原さん

いる。石原さんがこの「きち」を通して思うのは、子どもたち同士でコミュニケーションを図れることと道具を使いこなせる能力を育てることである。この「きち」の子どもたちは、下は幼稚園児から上は小・中学生までと広く、しかも学校も男女も問わない。ここには今見過ごしがちなグループを超えたコミュニケーションがある。最初はとけ込めないでいる子どももそれぞれ個性にあわせた遊びを工夫し、遊びの輪の中に入っていく。遊びのマジシャンである。遊びがバーチャル化しつつある現代にあつて、実際に自分の手で遊び道具を作りそれを使って楽しむ機会はそうあるものではない。子どもたちは遊びながら石原さんたちリーダーのサポートのもと計り知れない能力を身につけて

いくのである。

かけがえのない ギヤランティ

この「きち」での活動でかけがえのない体験をしているのは、実は子どもたちだけではない。リーダーとして参加している石原さんたちも子どもたちと同じようにこの活動を通じて貴重な体験をしている。部活帰りに「きち」に顔を出して相談に来てくれるOBたちの存在、そして、この活動に援助いただけると子どもたちの親御さんたちの存在があるからだ。片づけを手伝ってもらったり、けんかの仲裁を感謝されたり、さらにリーダーとして参加している学生たちが地域に向き地域の人たちとふれあいを持つてきつかけとなつていくことである。リーダーたちにとつてかけがえのない報酬である。

「きち」の充実と 思いを馳せる

「大きな遊具があり、火や水を使って精一杯遊べる場



所があれば」、「各地区で同じような活動ができれば」、「コンクリートではなくもつと土を使った公園があれば」と、リーダーが集まって開く反省会でも次々とアイデアが湧いてくる。しかしその中でも、これが足りないから活動が十分にできないといった不満は聞かれない。その姿勢はあくまでも真摯で謙虚である。「子どもを持たない私が、子どもや子どもを取り巻く環境を語る資格があるのか」と自問することも。この言葉を残して、石原さんは早くも子どもたちと手作りの弓矢に興じている。その周りには相変わらずたくさんの子どもたちが取り囲んでいる。